

あるとき実に正直な知人が言った言葉に驚いて私はあわてて話を終わらせようと速いテンポで喋りまくった。性格を知っている仲間内ならユーモアで済むところ、見ず知らずの他人にはそうもいかない場合がある。特に本人が意識しているだろう身体のコМПレックスに的中する言葉は禁句であろうと思われる。そのとき相手が内心機嫌を損ねたかどうかはわからないが、表面的には何とか無事に切り抜けたところでホッと一息。「この状況、何か似ているな」と今更ながらある光景が頭をよぎった。そう、それはピアノ一本で行うアマチュア・シャンソン・コンサートの一場面である。

歌い慣れないアマチュアの場合、歌が自分のペースにずれていくことがある。私はどちらかというと歌よりもピアノの音の方に神経が行っている割合が多いので、歌がずれ始めた時「あっ」と思うと同時に、ピアノの音が増えるのにも即反応する。「少し音が増えたわ」「だんだん音が増えていくわ」「相当音が増えたわ」「音が間断なく続くわ」と心の中の目がだんだん大きくなっていくのである。それは正に先の私の言葉のフォローと同じではないか、と今更ながら思う。フォローとは「わからなくなるくらい増やす」ものだと改めて認識する。

ある時ある画像で面白い光景を発見した。歌い手の音がずれた瞬間のピアニストの驚きの表情。そして更にピアニストが自分で口ずさんで見せる口の動き。心優しいピアニストなんだなあ。ところが歌っている方は夢中だからそんなことには一切気付かない。けれどうまいこと音の切れ目で歌が合った。気がついたとて途中で止めることが出来ない演奏で、ある意味ピアニストの腕の見せ所である。そういえば歌がずれた時に無然とした表情で音を増やしていたピアニスト、知らん顔して最大限音を増やしたピアニストも目にしたことがある。何せ歌がつかずいたら目立つので、そこはやはり演奏の方でフォローするのが有無を言わず当然となる。何故なら観客は歌が狂った歌い手よりも、演奏が狂った伴奏者に多く罪をかぶせるからだ。「歌は素人だけれど、ピアノはプロなんだから」「歌を生かすために伴奏があるんじゃないの？」伴奏と演奏が違う所以である。そしてその合わせる時の対処の表情でピアニストの性格が分かるからなかなか興味深い。言葉とピアノ。どちらにしても「音」が増えるのはまずいことを緩和するためのフォローの場面ということだ。ついでに今更ながら思い出した。嘘つきは雄弁だ。しかしこの場合は嘘を見破られまいと余計なことを喋って墓穴を掘る。そう考えると他の場面でも言葉も使いすぎるとフォローのはずがフォローにならなくなる場合がある。Un ange passé...Les anges passent...ピアノの場合雄弁すぎるといえることはないのだろうか？いや、もしかしたらある。観客がピアノの音の多さに驚いて、歌をそっちのけでそこに集中してしまったとき。しかしこの場合は言葉と違って空白は生まれえない。間断ない音に騙され続けながら観客は過ぎゆく音に過ぎゆく出来事を忘れ去るだけである。すべては忘却の彼方へ。観客の頭の中には光りに包まれた空白が残るだけ。「今あったこと？よく覚えていないわ」

ところで今更ながら、性格は変えることが出来ないから口が滑るのは本人の意識外だとしても、頭脳に関しては本人が認識している場合が多いので比較的傷は浅くても、肉体に関するCOMPレックスは口にしないように配慮してください。どこかで私の口調が超速になったとき、それは紛れもないフォローです。結果は別として。(2012.9.2)